石井至の世界放浪記〈上〉

小手鞠さん招き、釧路でオーディション

蝦名市長を表敬訪問した小手鞠さん（左）と夫のグレンさん（右）

この原稿は、モスクワのホテルの窓から、「赤の広場」を望みながら書いている。モスクワに来た理由は、2カ月前に訪問したスコルコボ・ビジネススクールの5周年記念パーティーに出席するためだ。運がよければ、メドベージェフ大統領にも会えるということだが、さてどうなることか。

最近のメーンイベントは、ニューヨーク在住の恋愛小説家・小手鞠るい先生を釧路にお招きして、2013年に石井兄弟社から出版予定の恋愛小説の取材をしていただくとともに、表紙のモデルを決めるオーディションを実施することだった。

内緒の話だが、今回の小説は主人公がアイドル歌手という設定だ。小手鞠先生は最近の日本事情を知らないため、「おニャン子クラブでしょ？」という。「これはまずい。イメージに齟齬がある」と思い、釧路にくる2日前に秋葉原のAKB劇場にライブを見に一緒に行って頂いた。

秋葉原のAKB劇場へ案内

AKBは秋葉原のこの劇場で、なんと毎日、ライブを行っている。私たちが見に行ったときは、チームAの日だった。売れっ子の「あっちゃん」こと前田敦子さんは他の仕事で欠場。それでも、リーダーの「タカミナ」こと高橋みなみ、うちの息子のお嫁さんにと密かに狙っている高城あきさん、最近の私のお気に入りである「さしこ」こと指原莉乃さんは出演していた。

昔は閑古鳥が鳴いていたAKBだが、今や、毎日のチケット倍率100倍の抽選に当たらないと見られない。もちろん抽選では到底当たらない。仕方ないので、飲み仲間の秋元さんに頼んでチケットを取ってもらった。秋元さんとは、作詞家でAKBプロデューサーの秋元康さんではなく、弟の伸介さんだ。秋元康事務所の取締役をやっている。最近は海外出張が多く超多忙の様子。お互いに仕事の共通点はないが、同じ年なので仲良くしてもらっている。

小手鞠先生は、AKBの予備知識がなかったが「あの子は輝いているわね」と目を付けたのがタカミナだった。ライブは、終了後に観客とメンバーがハイタッチして退場する。ご主人のグレンさんは「アメリカでは未成年者の体に触れるのは、たとえハイタッチでも性犯罪になる」と反省していた。ここは日本だから心配ないのだが。

9月2日、小手鞠ご夫妻と私の3人はJAL便で釧路に向かった。あいにく台風で悪天候だったが、我々の飛行機は無事着陸できた。

石井至の世界放浪記〈中〉

小説の表紙モデルは三島さんに

恋愛小説の表紙モデルに決まった三島さん（中）

翌日3日は、いよいよ、小手鞠小説の表紙のモデルを決めるオーディションの日だ。

午前中、今回のオーディションを共催していただいたリライアブルの佐藤専務にあいさつするため、小手鞠先生ご夫妻と、小手鞠先生の最新刊「望月青果店」の担当編集者である中央公論新社の角谷さんと一緒にコーヒーを飲んでいるが、出版業界で有名だ。不況下にもかかわらず快進撃を続ける佐藤ご夫妻は今を伝説上の人物で、出版社の営業部長でもなかなかご夫妻には会えない。現場の指揮は、普段は札幌にいる藤原常務だ。私は高校生の頃、丸三鶴屋のブッ

レベル高く、朗読も堂々

クセンターの学習参考書売り場の常連だったが、見覚えがあると思い話をしてみると、藤原常務は当時、やはり学習参考書の担当だったという。

竹老園で「そば寿司」「かしわそば」を食べて、いざ、オーディションの会場となったキャッスルホテルへ戻る。すでに、FMくしろの阿部局長と司会のプロ三島さんが、準グランプリには高校3年生の三島さんが、準グランプリにはFMくしろの阿部局長と司会の今さんの美女二人組が意外調整問も務めているが、出版業界でコーチャンフォーは全国屈指の集客力・販売力がある書店として有名だ。不況下にもかかわらず快進撃を続ける佐藤ご夫妻は今を伝説上の人物で、出版社の営業部長でもなかなかご夫妻には会えない。現場の指揮は、普段は札幌にいる藤原常務だ。私は高校生の頃、丸三鶴屋のブッ

チャンフォー釧路店を訪問した。佐藤ご夫妻は表に出たがらないが、いつも優しく接して頂いて感激する。大学の哲学教授のような社長と、社交的で気配り上手な専務のご夫婦の見事なコンビネーションだ。この日は役員会の最中にもかかわらず、佐藤専務と藤原常務が対応に出ていた。私は角川春樹事務所の顧問も務めているが、出版業界でコーチャンフォーは全国屈指の集客力・販売力がある書店として有名だ。不況下にもかかわらず快進撃を続ける佐藤ご夫妻は今を伝説上の人物で、出版社の営業部長でもなかなかご夫妻には会えない。現場の指揮は、普段は札幌にいる藤原常務だ。私は高校生の頃、丸三鶴屋のブッ

小手鞠先生のご主人のグレンさんは特別審査員で参加いただいた。

参加者の方々のレベルは非常に高かった。容姿もさることながら、ラブレターの内容がバリエーションに富み、朗読も堂々としていた。グランプリには高校3年生の三島さんが、準グランプリにはFMくしろの阿部局長と司会の今さんの美女二人組が意外調整とリハーサルをしていた。そのうち、参加者も集まってきた。オーディションでは、ラブレターの朗読をしてもらうことになっていた。審査員は小手鞠先生と蝦名市長、JR北海道釧路支社の原次長、FMくしろの阿部局長、釧路市産業クラスター創造研究会長の宮田さん、釧路新聞の伊藤常務、私の7人で、紙イメージは、冬の真っ白な雪の中に佇む少女の姿を考えているので、グランプリの三島さんには申し訳ないが、雪の中での撮影に協力してもらうことになるだろう。

夜は、蝦名市長からお誘いを受けて、小手鞠先生ご夫妻と共に花火大会を観覧した。見事な花火だったが、1発300万円の三尺玉が霧で見られないのはがっかりした。一瞬のほのかな輝きと音の響き、円弧の一部が見えただけ。それでも300万円を惜しまない酔狂に感服した。

花火の後は福田君の「ふく亭」にお邪魔した。小手鞠先生は、実は生の魚介類が苦手で、面白いことにグレンさんは大好物。お二人仲良く、コース料理を交換している姿は、まさにおしどり夫婦。微笑ましい光景だった。

（石井兄弟社社長）

石井至の世界放浪記〈下〉

阿寒湖の「鄙の座」でくつろいだ小手鞠さん夫妻

鄙の座はミシュラン級

翌日曜日の4日はノロッコ号の取材だった。小手鞠るい先生の小説の中で、ノロッコ号は釧路キャッスルホテルとともに重要な場面で登場する予定だ。しかし、意外なことに一番盛り上がっていたのは、ご主人のグレンさんだった。グレンさんはいわゆる「鉄ちゃん」だ。JR北海道取締役釧路支社長の矢崎義明さんの代理で、前日のオーディションの審査を務めていただいた原政臣さんがノロッコ号を案内してくれたのだが、グレンさんは原さんと尽きない鉄道談議で盛り上がっていた。

今回の取材に先立って、8月末にJR釧路支社にあいさつに行き、矢崎支社長と面会した。私の先入観で、JRは保守的な会社だと思っていたのだが、矢崎さんは試行錯誤をいとわないアイデアマンで驚いた。殿様商売のスタンスでは、成り立たないのだろう。チャレンジする人材を積極的に登用しているように思えた。

ノロッコ号で釧路湿原を満喫したあと、塘路駅からは車で市内に戻り、皐屋のスパカツを見ていただき（私が食べた。懐かしい味だったが、中年太りの体につらかった）。「どんぱく」の岡山県物産のテント、和商市場、若者が集つイオン昭和店、湿原展望台を見て、阿寒湖畔の「鄙の座」に向かった。

「どんぱく」のテントで、岡山県出身の小手鞠先生はブドウが売り切れているのを見て、うれしそうにしていた。そのとき、突然、「小手鞠先生ですね」と声を掛けられた。小手鞠先生が驚いてテントの前で客引きに声を掛けられたら、実は、その方は客引きではなく、市の観光局の方だったのだ。あまりにも客引きをしている姿が板についていたので、テントに出店しているお店の人だと疑わなかった。市役所の人材は奥が深い。

阿寒湖畔の高級旅館「鄙の座」は素晴らしいところだった。私は、世界のお金持ちが行くリゾートホテルのガイドブックを出版し、ヨーロッパやアメリカ、カリブ海やアフリカまで取材している。その中でも、「鄙の座」はまったく非の打ちどころのない、すばらしいリゾートだ。笑顔の接客、細かい気配りがいい。食事もおいしい。ミシュランで星をとるレストランには、料理の種類の違いはあっても共通することがある。それは、素材に雑味がないことだ。つまり、吟味した素材しか料理に使わない。「鄙の座」の料理にも、そういう素材の良さを感じた。とりわけ、デザートのチーズケーキの味は、すっきりと美しい。

グレンさんは「鄙の座」のホームページをニューヨークの自宅で見ていて、温泉や料理を楽しみにしていたそうだ。来日直前に、大きなハリケーンがニューヨークを襲い、公共交通機関が止まったため、普段は3時間程度で着くJFK空港まで7時間かかったという。また、台風に備えて、自家発電の装置を自宅に設置したらしいのだが、その時の工事業者との対応でも、苦労なさったようだ。いろいろな苦労にぶちあたるたびに、「鄙の座」のホームページを見た温泉や料理を思い出し、「これを乗り越えれば、『鄙の座』に行ける」と、心の支えにして乗り切ってきたというのだ。ご夫妻も、「鄙の座」を満喫していただいたことだろう。

月曜日は、雨の中、阿寒湖の遊覧船に乗り、マリモ研究室の若菜勇さんからマリモについていろいろ教えていただいた。私は自分の無知を実感した。マリモは光にほとんどあたらなくても、水の中で3年間は生きていられるというのだ。まさに、省エネ生物である。その謎に若菜さんは日々挑んでいる。

昼食は、阿寒湖畔の「パンデパン」というパン屋さんで食べたが、これがまたおいしい。コーチャンフォー釧路店のミスタードーナツもおいしかったが、このパンもおいしい。やはり、使う水が良いからだろう。「パンデパン」は小麦粉などの材料も吟味して使っているという。

3泊4日の取材旅行だったが、釧路出身の私にもいろいろな発見があった。小手鞠先生も今や大の釧路好きである。今回の取材旅行を整理して、早ければ年内には執筆を開始していただけるという。本の編集者というのは、好きな作家に、好きなことを書いてもらえて、それを最初に読めるという特権がある。私も、小手鞠先生の作品を心待ちにしている。

（石井兄弟社社長）

《おしまい》

《おしまい》石井至さんの世界放浪記は今回をもって終了します。